

群 教 ゼ	G14	01
	平15.211集	

今こそ見直そう! 自校の「総合的な学習の時間」

主 題 「総合的な学習の時間」の充実と改善に向けた
カリキュラム評価の進め方
群馬県内小・中学校における実施状況と成果
に関する調査を通して



長期研修員 清水 克則 (総合的な学習の時間)

研究の概要 当センター研修員を対象に「総合的な学習の時間」の見直しに関する意識調査を行った。次に、この結果を分析して県内小・中学校におけるこの時間の実施状況と成果に関するアンケートを行い、充実と改善に関する課題を明らかにした。さらに、これらの結果を踏まえてカリキュラム評価チェックシートを作成し、見直しや改善策に関する職員間の情報交換が、効果的、効率的に行えるようなカリキュラム評価の進め方を工夫し提言する。

キーワード 【総合的な学習の時間 カリキュラム評価 小中学校 教育課程 学習改善】

はじめに

1 総合的な学習の時間の見直しの必要性

各学校における「総合的な学習の時間」の目標や内容等は、学習指導要領のねらいや例示を踏まえて独自に設定されている。そのため、自校の取組について絶えず点検、評価し、充実と改善に努める必要がある。

また、学校は、この時間の実施によって児童生徒にどんな力を身に付けさせるのか、これまでの取組でどのような成果が見られてきたのかを明らかにし、保護者や地域の人々に説明するとともに一層の理解と協力を得ることが求められている。

2 見直しに関する教師の意識と課題

小・中学校では、「総合的な学習の時間」が本格的に実施されて2年目を迎え、これまでの取組について見直しが行われてきている。この見直しに関する課題を探るための予備調査として、当センター研修員144名(小・中学校置籍、在籍)を対象に意識調査を行った。

その結果、学校全体での見直しが十分に行われたと「とても思う」との回答は1割ほどであった(図1)。また、見直しが十分に

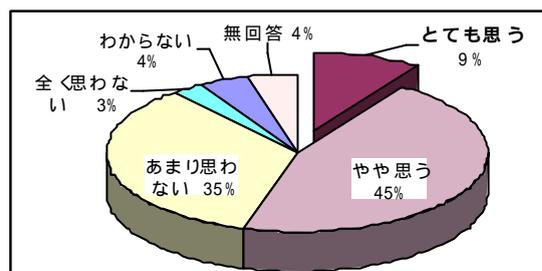


図1 見直しが十分に行われたと思うか

われたとは思わないという理由では、「見直しの時間が十分でない」「視点がはっきりしない」「見直しの時間が年度当初に設定されていない」等が見られた。

これらのことから、県内の小・中学校では、多くの教師が見直しの必要性を感じてはいるものの、十分に行われないうまま次年度の実施に踏み切らざるを得ない状況がうかがえる。

研究のねらい

予備調査の結果を踏まえ、群馬県内小・中学校における「総合的な学習の時間」の実施状況と成果や課題について調査し、充実と改善に関する課題を明らかにするとともに、効果的、効率的なカリキュラム評価の進め方を工夫し提言する。

調査について

1 実施状況調査による課題の把握

(1) 予備調査

本調査の実施前に、当センター研修員を対象にして、「『総合的な学習の時間』の成果と見直しに関するアンケート」(前述)を行った。その結果と考察、アンケート用紙は、資料編に掲載する。

(2) 本調査

予備調査の結果と分析を踏まえ、「群馬県内小・中学校における『総合的な学習の時間』の実施状況と成果に関するアンケート」を行う。質問内容は、カリキュラムの整備状況や成果としての児童生徒の変容、充実や改善に関する課題等である。

調査結果の分析と考察、アンケート用紙は、資料編に掲載する。

(3) 調査結果を踏まえて

カリキュラム評価の進め方を考えるに当たっては、本調査から得られた結果や分析を踏まえて行う。調査結果の分析から、「総合的な学習の時間」の実施や充実と改善に関する課題を明らかにし、県内の学校の実態を踏まえたカリキュラム評価の進め方を工夫する。

2 本調査結果の分析

(1) カリキュラムの整備状況

育てたい資質・能力・態度や発達段階に応じた学習内容、年間活動計画は、ほとんどの学校で設定されている。これらに対し、目標や評価の観点、評価規準は、「設定に向けて検討中」と回答した学校が多い(図2)。

これらのことから、学校によってカリキュラムの整備状況に差が見られることが分かる。

(2) 評価方法と評価の活用状況

児童生徒の学習状況や成果を評価する方法として、行動観察やワークシートの記述、自己評価等を取り入れている学校が多い。このことから児童生徒の成長や変容を評価の対象として見取ろうとする取組がうかがえる。しかし、保護者や外部協力者からの評価、学習

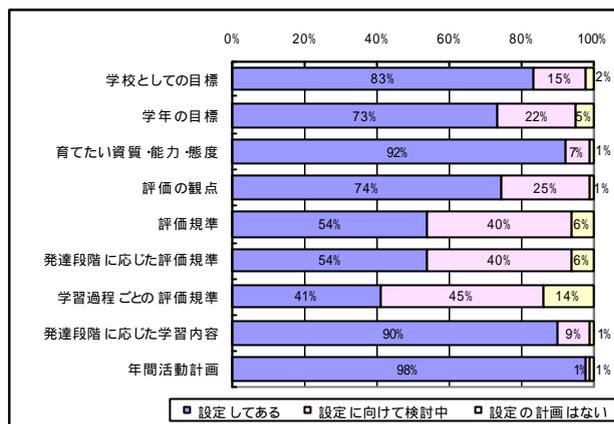


図2 カリキュラムの整備状況

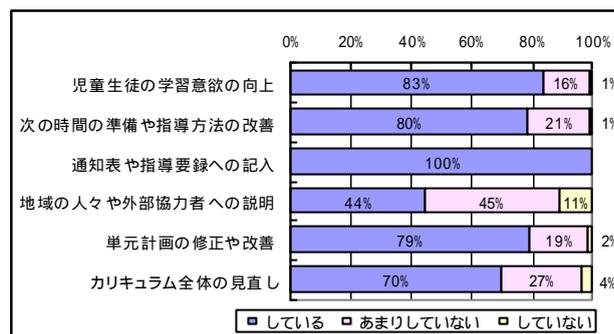


図3 学習評価の活用状況

相談(面談)を取り入れている学校は、ほとんど見られない。

また、評価の活用としては、次時の準備や指導方法の改善、単元計画の修正、カリキュラム全体の見直しを行っている学校が、7~8割見られる(図3)。これに対し、評価結果を地域や外部協力者への説明に用いている学校は半数程である。このことから、外部評価の導入や外部への説明責任を果たす取組は、これからという学校が多いことが分かる。

(3) 学習成果としての児童生徒の変容

小・中学校とも、「情報を自分で集め、調べ、まとめる」姿がよく見られると回答した学校が多い。逆に、「学習したことを生活に生かす」「自己の生き方を考える」態度は、あまり見られないと回答した学校が多い。

こうした意欲や態度、思考や判断力は、学習の成果としてすぐには表面化しにくいのが、学習したことが、実生活に結びついていない様子が見える。(資料編参照)

(4) 見直しの観点、充実と改善に関する課題

見直しが必要と思う観点では、学習内容、

評価、単元計画、指導に関することが多い。「充実や改善に関する課題」の記述でも同様の傾向が見られる。このことから、多くの学校では、試行期間に単元の開発が先行し、教科等との関連や評価に関する研究が後から行われている様子がうかがえる。

また、共通理解や協働体制がなかなか図れないことや情報交換の時間が十分もてないこと、具体的な改善策が見いだせないこと等も課題として挙げられている。(資料編参照)

カリキュラム評価の進め方を考える際の留意点

カリキュラム評価の進め方を考えるに当たっては、本調査結果の分析を踏まえて、次のようなことに留意していくことにする。

学校間に見られるカリキュラムの整備状況の差に対応する。

教科等との関連を図った育てたい資質・能力・態度の分析と明確化を重視する。

学校からの情報発信と保護者や地域等との連携、学校間連携の必要性に着目する。

身に付けた知識・技能を学習や生活に生かせる能力と態度の育成を重視する。

職員間の協働体制と情報交換の効率化に役立つようにする。

カリキュラム評価の進め方

1 基本的な考え方

(1) カリキュラム評価とは

学習指導要領に示された「総合的な学習の時間」のねらいや時数、例示を踏まえて、各学校で設定される、目標や育てたい資質・能力・態度、学習内容、評価の観点、評価規準、年間活動(指導)計画、評価計画、各単元の計画、授業計画及びその実施等を「総合的な学習の時間」における「カリキュラム」*¹とする。また、これらをよりよく修正、改善するために見直しを行い、改善策を検討することを「カリキュラム評価」*²と表す。

これに対し、「評価」や「学習評価」と記

した場合は、児童生徒の学習状況や成果を評価することを表す。

(2) カリキュラム評価の場面

カリキュラム評価では、目的や実施時期によって次のような場面が考えられる*³。また、その進め方を次ページ図4に示した。

授業評価

形成的評価によって、個々の児童生徒の学習状況に応じ、学習意欲や能力を高める指導や支援を行う。また、授業評価の結果から、次の時間の授業計画を修正、変更したり、教材教具等の準備や学習進度、児童生徒の学習状況等に関する情報交換を行う。

単元評価

単元の実施前に児童生徒の実態を把握し、計画の修正や指導の工夫、学習環境の整備、あるいは、新たな単元の開発を行う。

単元の実施後には、児童生徒の学習の評価結果や集積した授業評価を次の単元計画の修正にすぐ生かすようにする。また、実施上の課題や改善点、学習内容に関して新たに得られた情報等を記録し、次年度に引き継ぐ。

年間計画の評価

各学年ごとに、授業評価や単元評価の集積を基に行い、学年の目標が達成されたかどうかを検証する。その結果によって、単元の学習内容や配列、配当時数、実施時期、学年間のつながり等について見直しを図る。

カリキュラム全体の評価

各学年の授業計画や単元計画、年間計画における計画・立案 実施 評価 改善の検討といったサイクルの中で、計画の修正や指導の改善が繰り返し行われ、次年度に向けての課題も集積される。それらを踏まえ、カリキュラム全体の作成や実施状況について、適宜、評価し改善の検討を行う。その結果、年度内に改善できることはすぐに着手し、次年度に向けての課題には改善策を講じる。

また、この時間のねらいや学校の目標の達成状況についても検証し、その成果と課題の原因や根拠となることをカリキュラム全体の中から探る。さらに、改善策の検討では、教育課程全体のレベルからの評価を加え、各教科等との関連についても見直しを図る。

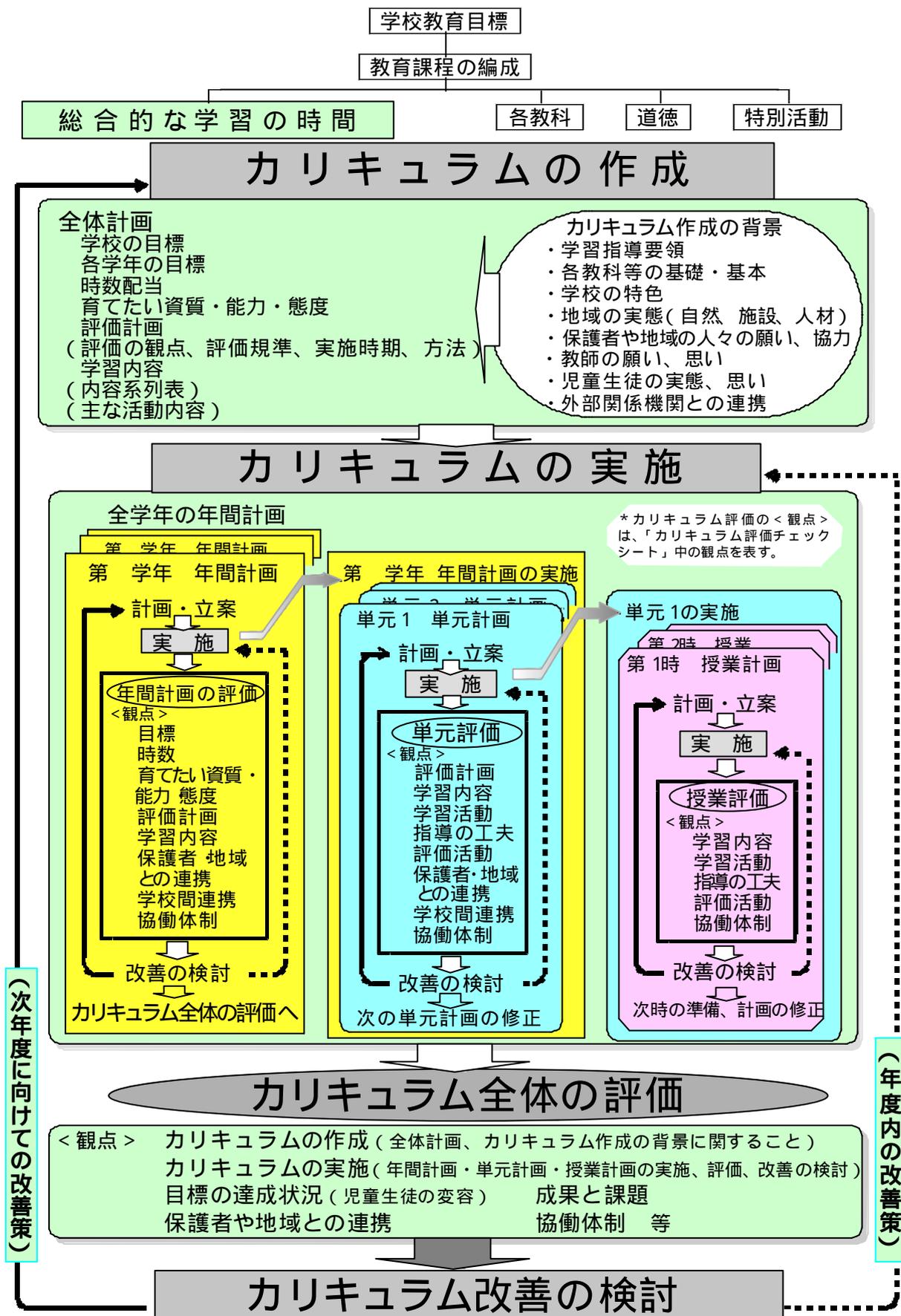


図 4 「総合的な学習の時間」のカリキュラム評価の進め方

2 カリキュラム評価チェックシートの作成と活用

(1) チェックシート作成の基本的な考え方

「総合的な学習の時間」におけるカリキュラム評価を実施する場合、教師間の共通理解の下に、年度当初から計画的、組織的に行うことが必要である。また、見直しの視点は、1単位時間の授業計画や指導内容からカリキュラム全体の計画に至るまで多方面に及ぶ。そのため、効果的、効率的にカリキュラム評価を行うための工夫が大切である。

そこで、現状と課題、改善策の例を一覧にしたカリキュラム評価チェックシート^{*4}（表1 以下、「チェックシート」と表す）を作成することを考えた。これを基にして、改善の視点や努力点について職員間で情報を交換したり、具体的な方策について検討したりするなど、共通理解を図るための資料として活用することができるようにした。

(2) チェックシートの構成

「観点」と「項目」の欄

先の本調査の結果と分析を参考にして、次のようなカリキュラム評価の観点を設定した。

- ・カリキュラムの作成に関する観点
目標、時数、育てたい資質・能力・態度、評価計画、学習内容
- ・カリキュラムの実施に関する観点
学習活動、指導の工夫、評価活動
- ・カリキュラムの改善に関する観点
保護者・地域との連携、学校間連携、協働体制

また、これらの観点から見直しのための項目を設定し、チェックシートに例示した。特に、本調査結果の分析から、今後、重点を置いて改善に取り組む必要があると思われる項目には、印を付けた。

実際に各学校で用いる場合には、学校の実態や方針、取組に合わせて、設定内容を変えたり省いたり、あるいは別な観点や項目を加えたりすることも考えられる。

「段階」の欄

本調査で明らかになったように、学校によってカリキュラムの整備状況や取組の様子に差が見られる。したがって、この時間の充実、

改善のための課題や方策も、学校によって異なる。これに対応するために、チェックシートでは、本調査結果に見られた学校の取組を参考にして、3つの段階を設定し改善策を例示した。段階3には先進校の事例を取り上げ、段階が上がることにより高次の努力目標や内容となるように設定した。

項目によっては、3つの段階で示した内容が学校の実態に合わない場合もある。また、必ずしも段階を順に追って進めなくてもよい。各学校の実態に応じて、目指す段階を選んだり観点ごとに重点を決めたり、あるいは、いくつかの項目を組み合わせる改善の努力点を設定したりする等の活用の仕方が考えられる。

「状況」と「目標」の欄

カリキュラムの整備や取組に関して、現時点での自校の状況を点検、評価したり、充実や改善のための課題や努力目標を設定したりする場合に、チェックする欄として設けた。

具体的な記入の仕方については、後述する。

(3) チェックシートの活用

カリキュラムの共通理解（年度当初）

前年度のカリキュラム評価の結果をチェックシートで確認したり、今年度のカリキュラムの全体計画や改善策、努力目標等について共通理解を図ったりするときに用いる。

また、新たな単元を開発するときの留意事項を確かめるときにも利用できる。

授業評価、単元評価、年間計画の評価（年度中）

カリキュラムの実施に関する観点（学習活動や評価活動、指導の工夫）で見直しを図り、改善策を講じた場合、その進捗状況によっては、適宜、チェックシートで確認しながら改善策について再検討する。また、その修正や変更を行う場合にもチェックシートを用いる。

カリキュラム全体の評価（年度中、年度末）

児童生徒の変容や学習成果に関する資料とともに、授業評価や単元評価、年間計画の評価で用いたチェックシートを基にして、カリキュラム全体の評価を行う。その際、年度当初にチェックシートで確認した改善策や努力目標の達成状況を明らかにし、次年度に向けて改善の検討を行うときにも用いる。

表1 「総合的な学習の時間」のカリキュラム評価チェックシート

観 点	目 標	段 階 1	状 況	目 標	段 階 2	状 況	目 標	段 階 3	状 況	目 標
目 標	学校の目標	教師間の共通理解の下に設定している			教師から見た児童生徒の実態や学校、地域の特色を踏まえて設定している			児童生徒の実態調査、保護者や地域の願いのアンケート結果も踏まえて設定している		
	学年の目標	学校の目標を受けて教師間の共通理解の下に設定している			教師から見た児童生徒の実態を踏まえて設定している			児童生徒の習熟度や学習状況の調査を踏まえて設定している		
時 数	時間割編成	効果的に学習活動が行えるように学校全体で時間割の工夫を行っている			時期や学習内容に応じて弾力的に時間割を編成している			2時間連続やモジュールを用いる等、学校全体で弾力的な時間割の工夫に努めている		
	選択教科との時数配分(中学校)	選択教科と「総合的な学習の時間」の時数を適切に配当している			生徒の興味・関心を踏まえてそれぞれに必要な時数を配当している			生徒の興味・関心に基づいた学習内容に必要な時数をそれぞれ配当している		
育 たい 資 質 能 力 態 度	内容分析	「総合的な学習の時間」のねらいを踏まえて育てたい資質・能力・態度を設定している			「総合的な学習の時間」のねらいと自校で定めた目標や内容を基にして育てたい資質・能力・態度を設定している			教科等の目標や内容との関連を明確にし、発達段階や児童生徒の習熟状況を踏まえて育てたい資質・能力・態度を設定している		
	学習スキル	調べ方やまとめ方、報告や発表、討論の仕方等身に付けさせたいスキルを示している			身に付けさせたいスキルを発達段階に応じて設定している			個々の児童生徒のレディネスを把握し発達段階や習熟度に応じて設定している		
評 価 計 画	評価の観点	「総合的な学習の時間」のねらいを踏まえて設定している			ねらいを踏まえ、自校の育てたい資質・能力・態度を基にして設定している			さらに、教科等との関連を明確にし、発達段階に応じて学年ごとに設定している		
	評価規準	評価の観点ごとに作成し、単元計画に示している			児童生徒の発達段階に応じて作成し、各学年の単元計画に位置付けている			さらに、教科等との関連も踏まえて作成し、学習過程ごとに位置付けている		
	計画・立案	評価の目的や方法、実施時期の計画を立てている			教師の評価や児童生徒の自己評価、相互評価等の方法や実施時期、活用の計画を立てている			教師、児童生徒、保護者や外部協力者それぞれの評価とその活用が効果的に行われるように計画を立てている		
学 習 内 容	単元の開発計画・立案	担当学年の教師間で共通理解を図っている 体験活動や問題解決的な学習を取り入れている 児童生徒が学習活動を振り返り成果を確かめる場面を設定している			他学年の教師とも情報交換を行っている 今日的な課題の解決を視野に入れ、横断的・総合的な内容を取り入れている 児童生徒が学習活動を振り返り自己の成長や変容した姿に気付く場面を設定している			外部協力者の意見も取り入れて単元を作っている 内容系列表を作成し、学習内容の設定について共通理解を図っている 児童生徒が学習活動を振り返り自己の生き方を考えたり生活に生かしたりする場面を設定している		
	年間計画	各学年ごとに作成している 活動の目的と学習内容に応じて必要な時数を配当して計画を立てている 基本的な学び方や学習スキル習得の時間を適宜取り入れている			他学年の内容や教科等との関連を明確にして学校全体で作成している じっくり探究活動を進められるように時数を配当して計画を立てている 学び方や学習スキル習得のための時間を単元計画に位置付けている			発達段階や学年の系統性を踏まえ、単元の配列を工夫して作成している 学習状況に柔軟に対応できるように時数を配当して計画を立てている 学び方や学習スキル習得のための時間を年間計画に位置付けている		
	実施時期	学習内容に応じて適切な実施時期を年間計画に位置付けている			小学校6年間(生活科と関連)、中学校3年間を見通して単元を配置し、学習内容に応じて適切な実施時期を設定している			小・中学校間のつながりや発展性を考慮し、学習内容や活動内容に応じて適切な実施時期を設定している		
学 習 活 動	教科等との関連	教科等との関連を意識して単元作りや計画・立案を行っている			教科等の学習内容や実施時期と関連させて学習が進められるように計画を立てている			身に付けた知識や技能、態度が教科等と相互に活用されるように、学習内容や学習展開が組まれている		
	課題・テーマ設定	指導要領に例示された課題を学校や学年のテーマとして設定している			学校や学年の目標を反映させたテーマを設定し、地域の特色を生かしている			小学校6年間、あるいは中学校3年間を見通して系統的なテーマの設定を行っている		
学 習 活 動	問題解決的な学習活動	問題解決的な学習の基本的な進め方が、共通に理解されている			問題解決的な学習の進め方が身に付けられるように、学習過程の各段階ごとに必要な学習スキルを示している			学習の手引等を用いて、児童生徒が自ら進んで問題解決や探究活動に取り組めるようにしている		

学 習 活 動	体験的な活動	校内での調べ学習を中心に追究活動が行われている	学校外での自然体験や社会的な体験活動を取り入れている	児童生徒の興味・関心や課題に応じて、学校の内外で体験的な活動ができるようにしている
	学び合い	児童生徒が協力して学習に取り組めるように工夫している	児童生徒が互いに意見交換したり話し合ったりしながら追究活動ができるようにしている	課題や目的別にグループ編成し、児童生徒同士の学び合いによって追究が深められるようにしている
	学習形態	個人、学級内グループ、学年内グループ等、いくつかの学習形態を取り入れている	目的や内容に応じていろいろな学習形態を工夫し柔軟に展開できるようにしている	目的や内容に応じて、異学年交流や学び合いの場も取り入れている
	情報機器の利用	調べ学習でインターネットを利用している	まとめや発表、情報発信でもインターネットを積極的に活用している 情報収集や活用の基礎技能の習得を計画的に行っている	学習過程の各段階で情報機器の積極的な活用を図っている マルチメディア等を利用して学校間交流を行っている
	学習環境	教室の他、学校内の学習スペースや図書室、コンピュータ室を利用している	児童生徒が積極的に追究や探究活動ができるように学校の学習環境を整備し、活用している（図書資料、コンピュータ、展示や作業の場等）	調べ学習や体験的な学習で学校外の施設も積極的に活用している（公共機関、資料館、博物館、公民館等）
指 導 の 工 夫	指導方法の改善、指導技術の向上	各学年で指導方法や指導技術について自己点検し改善に努めている	校内研修や学年部会等で互いに指導方法や指導技術の改善に努めている	さらに、分掌ごとの情報交換を密にし、日頃から互いに指導方法や指導技術の向上に努めている
	個に応じた指導	適宜、個別指導を取り入れ学び方や学習スキルが身に付くように努めている	個々の児童生徒の課題を把握し学習スキルの向上を図っている	形成的評価で指導と評価の一体化を図り、個に応じたきめ細かな指導を行っている
	自己評価力	児童生徒が学び方や学ぶ力について自らの習得状況をつかめるようにしている	児童生徒が自らの学習状況や習熟の程度を確かめられるように自己評価力の育成を図っている	学習の手引きやポートフォリオ等を活用して、計画的に児童生徒の自己評価力を高める指導の工夫をしている
	指導体制	学級担任や同学年の担当者と共通理解を図りながら指導にあたっている	他学年の教師や養護教諭等とも協力して指導にあたっている	全職員が計画的に指導や支援にあたれるように協働体制を整えている
	外部協力者の活用	学習内容に応じ、外部講師として保護者や地域の人々に依頼している	計画的に、外部講師として地域人材を活用する学習を取り入れている	地域人材や施設、団体、企業等の協力者を学習課題別にリストアップし積極的に活用している
評 価 活 動	評価方法、評価者	観察、ワークシート、発表内容等で、担当教師による評価を行っている	担当教師による評価、及び児童生徒による自己評価や相互評価を取り入れている	ポートフォリオや面談等で個々の児童生徒の学習状況の把握にも努めている 保護者や外部協力者からの評価も取り入れている
	評価の活用	学習の成果を把握し、児童生徒や保護者に評価結果を知らせている	児童生徒の学習意欲を高め授業計画の修正や指導の改善に生かしている	個に応じた指導や支援に生かしている 単元計画やカリキュラムの評価、改善にも生かしている 外部協力者や地域の人々への説明に活用している
保 護 者・ 地 域 と の 連 携	実態把握	保護者の願いや地域の実態について教師間で共通理解を図っている	保護者の願いや地域の実態をアンケート等で把握している	保護者の願いや地域の実態を把握し、計画、実施、評価、改善に反映させている
	説明責任	保護者に自校の「総合的な学習の時間」のねらいや取組について説明している	保護者や地域の人々に自校のねらいや取組について説明し理解と協力依頼に努めている	保護者や地域の人々に自校のねらいや取組、成果についても説明し積極的な協力を得ている
学 校 間 連 携	小・中のつながり	他の学校と学習内容や取組について情報交換を行う場がある	校区内の小・中学校間で学習内容や取組について情報交換を行っている	校区内外の小・中学校と情報交換を行い、交流活動や学び合い等を取り入れている
協 働 体 制	共通理解、情報交換	単元の計画や見直しを学年ごとに行っている	単元の計画や見直しを学年や部会ごとに行い、学校全体で共通理解を図っている	カリキュラム全体の計画や実施、評価、改善の検討等、全職員の共通理解の下で計画的、組織的に行っている

チェックシートを活用したカリキュラム評価例

ここでは、年度末に行うカリキュラム全体の評価と改善策の検討についての例を挙げる。

1 カリキュラム全体の評価

時期：年度末

担当：「総合的な学習の時間」を担当する部会（以下、総合部会と記す）や教育課程部会、運営委員会等

各学年の年間計画等の評価結果を資料として、学校全体の取組を点検、評価し、チェックシートの項目ごとに、学校の現状がどの段階にあたるかを「状況」欄に印（✓）を付ける。これを基にして、次年度に向けてどの観点からどのような項目で改善が必要かを検討し、「目標」欄に 印を付ける。

2 カリキュラム改善の検討

時期：年度末

担当：総合部会、校内研修等

表2から課題を探ると、学校としての育てたい資質・能力・態度や評価規準は設定されているが教科等との関連や発達段階に応じて示されていないこと、指導の改善は学年ごとに行われているものの学校全体での共通理解が図られていないこと等が挙げられる。

このように、年度末に、チェックシートの項目ごとに学校の課題を洗い出し、改善の努力目標を「カリキュラム改善案シート」（表3）に挙げていく。その際、教育課程全体からの評価を踏まえ、各教科等との関連を図るようにする。

これらの資料から総合部会で改善の検討を行い改善案としてまとめ、校内研修等で協議して職員間の共通理解を図る。

表2 「総合的な学習の時間」のカリキュラム評価チェックシートの記入例（部分）

観点	項目	段階1		段階2		段階3	
		状況	目標	状況	目標	状況	目標
育てたい資質・能力・態度	内容分析			✓			
	学習スキル	✓					
評価計画	評価の観点			✓			
	評価規準	✓					
指導の工夫・協働体制	指導方法の改善、指導技術の	✓					
	共通理解、情報交換	✓					

表3 「総合的な学習の時間」のカリキュラム改善案シートの記入例（資料編参照）

観点	項目	改善のための努力目標	成果と課題
		内容分析	各教科等との関連を踏まえ、身に付けさせたい学習スキルを分析、検討し、発達段階に応じて設定する。
学習スキル			
評価の観点	教科等との関連から育てたい資質・能力・態度を分析し、評価規準の見直しを図って、問題解決的な学習の各過程ごとに位置付ける。		
評価規準	学年会や全体会で情報交換を図るための共通の資料を用意し、共通理解を図る。		

3 改善策の具体化

時期：年度末

担当：総合部会、学年部会、校内研修等

先の改善案について協議した内容を総合部会で集約し、具体的な改善策を練る。ここでは、「指導と評価の一体化を図った授業改善に向けて、職員間の共通理解が円滑に行われるための情報交換資料を作成する」という改善策を取り上げる。具体的には、「単元評価シート」(表4)を作成し、指導の手だてと成果や課題の記録を通して指導法の研究を行い、情報交換資料として活用していく。

この「単元評価シート」は、予め、総合部会で「学習過程」「育てたい資質・能力・態度」「評価規準」「学習スキル」の欄を記入しておき、年度末に各学年に配付する。各学年部会では、実際に行った手だてや指導内容等を「指導の手だて」欄に書き込み、次年度に引き継ぐようにする。

4 改善策の取組

時期：次年度当初、次年度中

担当：総合部会、学年部会、校内研修等

次年度当初、校内研修等の機会に、「チェックシート」を用いて努力目標や改善策について職員間の共通理解を図り、「単元評価シート」の活用についても確認する。

学年部会では、各単元の実施前に、「チェックシート」や「単元評価シート」を参考にしながら、児童生徒の実態に応じた指導の手だてを工夫する。また、各単元の実施中や終了後には、主な指導や支援の手だてについて気付いたことや成果と課題を「単元評価シート」にメモしておく。

このようにして蓄積された指導記録は、校内研修で、年間計画の評価やカリキュラム全体の評価を行うときの情報交換資料として用いることができ、全体計画の見直しや授業改善、指導の工夫に役立てることができる。

表4 「総合的な学習の時間」の単元評価シートの活用例 (資料編参照)

(単元評価の基準： よく身に付いた 身に付いた 身に付いていない)

学習過程	単元名・活動名等			単元1	単元1	活動
	資質・能力・態度	学年の評価規準	学習スキル			
ふれつかむ	問題や課題を見付ける	身近な自然や地域から疑問を見付けることができる	課題発見力、情報収集力、分析力	ウェビング(学級全体から個人へ)		記入例 学級全体で疑問に思うことを挙げながらのウェビングは、有効。
見通す・計画を立てる	各学校の学習過程を記入する					をつけた場合や見直しが必要と思うこと、気付いたこと等もメモしておく
追究する・まとめる	学校としての育てたい資質・能力・態度を記入する	育てたい資質・能力・態度から学年の評価規準を学習過程ごとに記入する	各単元で身に付けさせたいスキル、教科等で身に付けた知識・技能で応用したい学習スキルを記入する	評価規準を達成させるための指導の手だてを記入する		単元ごとに児童生徒に育てたい資質・能力・態度が身に付いたかどうか(評価規準を達成したか)記入し、指導の手だての有効性について簡単に記述する
伝える・広げる						
振り返る・見つける						

総合部会で記入

学年部会で記入

授業者が記入

カリキュラム評価のための資料収集

カリキュラム評価を行うための資料として、児童生徒の学習成果やつまづきの原因を把握することが重要である。そのためは、学校として、児童生徒にどんな資質や能力を身に付け、どのように指導し評価するのかを明らかにしておくことが大切である。

また、「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力」の評価では、多方面からの情報が有効である。児童生徒による自己評価や相互評価、保護者の見方、あるいは外部協力者や地域の人々の声などを評価の参考資料として、意図的、計画的に集めるようにする。

1 児童生徒の自己評価から

多くの学校では、評価カードやワークシート、ポートフォリオ等を用いて児童生徒による自己評価や相互評価を取り入れている。これらの中に、カリキュラム評価にかかわる質問項目や選択肢(表5)を盛り込み、学習内容や指導計画の修正、指導の改善に生かすようにする。そのためは、導入段階で、目標

や学習のねらいに加え、評価規準についても児童生徒に説明しておくことが大切である。

図5は、児童生徒の自己評価の場面とその内容を示したものである。

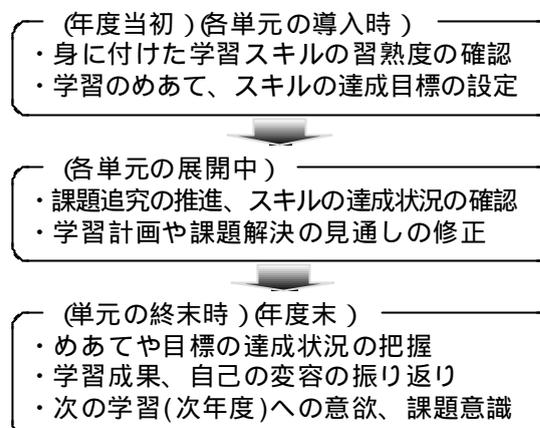


図5 児童生徒の自己評価の場面と内容

こうした児童生徒の自己評価の中に見られる達成感や満足感と教師による学習評価との一致やズレから、カリキュラム評価の資料が得られる。また、これを用いて個別に面談を行うことにより、個に応じた指導を充実させ、児童生徒の自己評価力を高めることができる。

表5 カリキュラム評価にかかわる主な質問項目例(児童生徒の自己評価)

主 な 質 問 項 目	評 価			
	とても 思う	やや思 う	あまり思 わない	全く思 わない
学習のねらいを理解して取り組むことができた。				
学習活動の見通しをもって取り組むことができた。				
学習スキルに関して自分の努力目標が達成できた。	1			
自分で納得した学習テーマや課題を決めることができた。				
自分から進んで活動することができた。				
教科等で身に付けたことを応用することができた。	2			
問題解決的な学習の進め方に慣れてきた。	3			
時間的なゆとりをもってじっくり学習活動に取り組むことができた。				
疑問やつまづきについて、自分から先生や友達に聞いて解決できた。				
グループで協力したり他の人と意見交換したりすることができた。				
教科等の学習内容について理解をより深めることができた。				
教科等で学習したことを日常生活と関連づけられるようになってきた。				
ものごとに対して意欲的、積極的に取り組むようになってきた。				
自分の将来や進路のことを深く考えるようになってきた。				
仕事や職業に関する考え方がしっかりしてきた。				
学校の図書室や学校外の公共施設を進んで利用するようになってきた。				
地域のことに関心をもったり地域の人々と接する機会が増えてきた。				

注:これらの中から必要な項目を取り上げ、学年の発達段階に応じた内容や表現に直して用いる。

- 1 情報の収集、処理、活用の仕方、報告や発表、討論の仕方、ものづくり等。
- 2 関連した教科等の内容から具体的な知識や技能を選択肢で挙げる。
- 3 各学習過程ごとに役に立った手段や方法(体験的な活動、交流活動、外部講師、情報機器、話し合い、発表会等)について、選択肢を挙げて質問する。

2 保護者の感想や意見から

保護者による学習評価は、児童生徒に活動意欲と充実感をもたせることができ、教師にとっては、カリキュラム評価の資料として活用することができる。

家庭や日常生活での児童生徒の変容の様子をカリキュラム評価に反映させ、適宜、指導の改善や計画の修正に生かしていく（図6）。実際には、児童生徒のワークシートの一部や通信等に必要な質問事項（表6）を載せて情報収集を行うようにする。

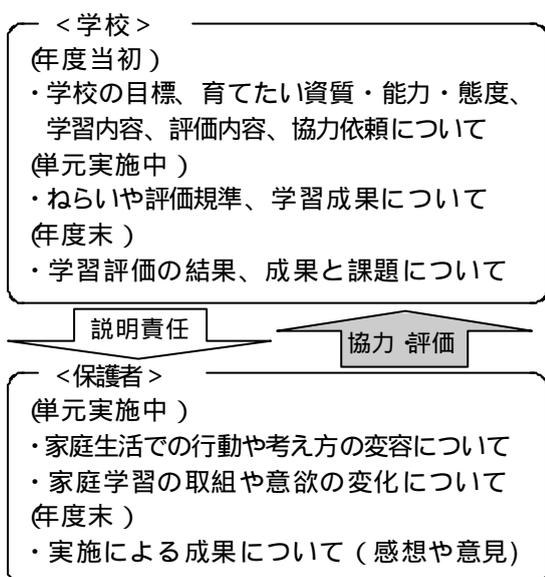


図6 学校と保護者との連携

表6 保護者への質問事項例

- ・疑問に思うことや分からないことを自ら進んで調べようとする様子が、以前より見られるようになったか。
- ・家庭学習に意欲的に取り組む様子が、以前より見られようになったか。
- ・以前より、ものごとに意欲的、積極的に取り組むようになったか。
- ・身に付けたことを学習や生活に生かそうとする様子が以前より見られるようになったか。
- ・夢や進路、職業等、将来のことについて以前より親子で話すようになったか。
- ・自然や地域、社会の出来事に対して、以前より興味、関心を示すようになったか。
- ・学校であったことや学習したことについて以前より家で話すようになったか。

3 外部協力者の感想や意見から

学校の教育活動の中で、外部の方々から協力を得る場面は多い。特に、単元の開発時から外部協力者と連携して取り組んでいる場合には、その単元のねらいや意図について理解が得られやすい。

しかし、すでにある単元計画の中で、講師の依頼や体験活動の場の提供をお願いする場合、事前の綿密な打合せが大切になってくる。その際、専門的な立場からの助言によって、単元の実施前に計画や学習内容の修正、変更をすることもある（図7）。また、授業後の学習評価とともに学習や指導内容についての感想や意見（表7）を聞くことによって、カリキュラム評価の資料とすることができる。

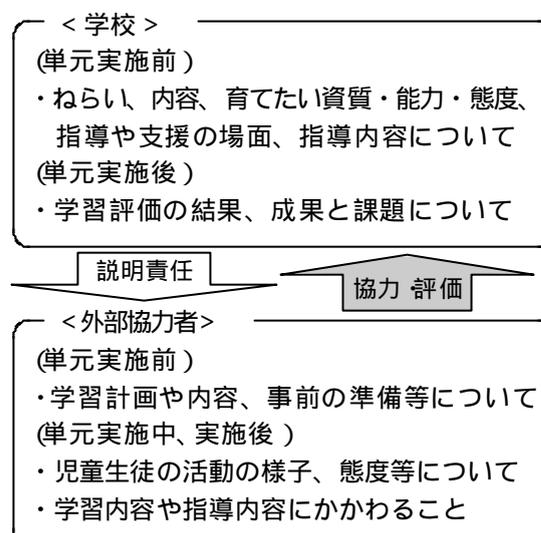


図7 学校と外部協力者との連携

表7 外部協力者への質問事項例

- ・学校のねらいや方針、取組についての説明が十分にあったか。
- ・学習内容や指導、支援の内容について事前に十分な打合せができたか。
- ・単元計画や学習内容について気付いたこと
- ・学習内容に関する専門的な立場からの意見や新たな情報、参考となる資料等について
- ・児童生徒の学習の様子、態度、言葉遣いや話し方について感じたことや気付いたこと
- ・学校からの協力依頼についての感想や意見（当日の日程、今後の協力の継続等）

4 学校評議員やPTA、地域から

学校評価にかかわる情報収集として、外部評価を取り入れる場合が多い。そうしたときに、「総合的な学習の時間」の取組や課題と成果について意見を求める機会を設ける。

例えば、学校評議員会議やPTA本部役員会、校区内の地区懇談会等の場が考えられる。そうした場合には、管理職や関係職員が出席することになるが、説明資料や意見を求める視点については、教育課程部会や総合部会等でも十分に検討しておくことが大切である。

おわりに

本調査の結果と分析から、県内小・中学校における「総合的な学習の時間」の充実と改善に関する課題として、次のようなことが明らかになった。

今後、育てたい資質・能力・態度として、特に、「身に付けた知識や技能を学習や生活に生かす」態度や「自己の生き方を考える」態度の育成を一層重視する必要がある。

カリキュラムの整備では、目標や評価の観点の設定、評価規準の作成に向けて検討中の学校が多く見られる。

実施上の課題では、学習内容や年間計画の見直しとともに、職員間の共通理解や協働体制を一層図る必要性がある。

こうした課題を解決する方策の一つとして、カリキュラム評価の進め方について研究し、効果的、効率的な見直しが行えるように「カリキュラム評価チェックシート」を作成した。その中で、3つの段階を設定したことにより、各学校の実態に応じて、課題の把握や具体的な改善策の検討ができるものとする。

このチェックシートは、県内の全小・中学校に配付した。今後、学校からの情報を収集し、項目や段階ごとの内容を修正することによって、チェックシートがよりよいものになると考える。また、問題解決的な学習過程の段階ごとに、育てたい資質・能力・態度と学習スキルについて分析し、より効果的な指導の手だてを探っていきたいと思う。

【共同研究者】

産業科学グループ

グループリーダー	植木 雄二
指導主事	高張 浩一
指導主事	宮内 光一
指導主事	武 倫夫
指導主事	川島 一秀

<参考文献>

- ・*1、*2 『研究紀要 第27集別冊』
佐賀県教育センター（2003）
- ・*3 『岩手県総合教育センター研究紀要』
「『総合的な学習の時間』に関する研究」
岩手県総合教育センター（1999）
- ・*4 研究報告書『21世紀型学力を育む総合的な学習を創る』 ベネッセ教育総研（2002）
- ・研究報告書『総合的な学習の授業及び評価に関する開発的研究』「総合的な学習の時間の授業と評価の工夫」 国立教育政策研究所（2003）
- ・『長期研修員研究報告書 第139集』
「『総合的な学習の時間』と各教科等とで培う資質・能力の関連を図った指導計画の構想」 群馬県総合教育センター（2001）

<参考図書>

- ・安彦 忠彦 著 『カリキュラム開発で進める学校改革』 明治図書（2003）
- ・高階 玲治 著 『総合的な学習を総点検する』 明治図書（2002）
- ・田中 博之 編 『総合的な学習のカリキュラムを創る』 明治図書（2002）
- ・21世紀カリキュラム研究会 編 『変革の中の学校・教師』 教育出版（2002）
- ・有園 格 編集 『弾力的なカリキュラム編成』 教育開発研究所（2001）
- ・小川 哲男 著 『総合と教科をつなぐカリキュラムデザインと評価の実際』 東洋館出版社（2001）
- ・群馬県教育研究所連盟 編著 『実践的研究のすすめ方』 東洋館出版社（2001）
- ・梶田 叡一 著 『教育における評価の理論』 金子書房（1997）